

(件名) 今年5月に大阪大学の研究者の方から発表された研究結果によると、
現行のワクチンは疾患増強（抗体依存性免疫増強，感染増強などと呼ば
れる現象）を誘導する可能性があるため，その注意喚起を求める陳情

(陳情の要旨)

5月24日に大阪大学のサイトに公開された「新型コロナウイルスの感染を増強する抗体を発見—COVID-19の重症化に關与する可能性—」（別紙）によると、
>新型コロナウイルスに感染すると、感染を防ぐ中和抗体ばかりでなく、感染を増強させる抗体（感染増強抗体）が産生されることを発見した。

>感染増強抗体が新型コロナウイルスのスパイクタンパク質の特定の部位に結合すると、抗体が直接スパイクタンパク質の構造変化を引き起こし、その結果、新型コロナウイルスの感染性が高くなることが判明した。

>これまで機能が不明であったNTDがスパイクタンパク質の機能を制御している重要な領域であることが明らかになった。実際、最近の多くの変異株はNTDにも多くの変異が認められるので、RBDの機能に影響を与えている可能性がある。従って、今までは主にRBDの機能のみが注目されてきたが、NTDを標的にした感染制御法の開発も重要であると考えられる。

とあり、新型コロナにおいては、旧来のサーズ、マーズなどのコロナウイルスでの疾患増強（または感染増強，抗体依存性免疫増強などと呼ばれる現象）を起こす仕組みとは別の形で、それが起こることが分かったとしています。

更に、

>感染増強抗体の認識部位は現行ワクチン抗原にも含まれている。従って、感染増強抗体の産生を誘導しないワクチン抗原を開発することが望ましい。本研究で明らかになった感染増強抗体の認識部位を改変することで、感染増強抗体の産生を誘導しないワクチン開発が可能になると期待される。

とされています。

つまり、現行ワクチンを接種すると、その結果、感染増強抗体が体内で産生されることになるのです。

しかしながら、日本で現在接種されているワクチンについて、それぞれの説明文書には、次のように記載があり、旧来のコロナウイルスで疾患増強を起こすと考えられてきた仕組みしか考慮されていないことが分かります。

ファイザーのコミナティ筋注の「適正使用ガイド」より引用：

>SARS-CoV-1ワクチン候補を評価するために開発された動物モデル（マウス，フェレットおよび非ヒト霊長類）では，一部の研究で生ワクチン接種後のウイルス曝露時に疾患増強が認められました。また一部のMARSワクチン候補において，マウスモデルで疾患増強が認められました。

>疾患増強の潜在的なメカニズムは，T細胞媒介性（Th1よりもTh2による免疫病理学的反応）と抗体媒介性（中和活性が不十分な抗体反応が導く免疫複合体の形成および補体の活性化もしくはFcを介したウイルス侵入の増加）の両方であると考えられています。

「COVID-19ワクチンモデルナ筋注に係る医薬品リスク管理計画書」から引用：

>ワクチン関連疾患増強の主な機序として，Th2タイプの免疫応答に起因する好酸球浸潤を特徴とする気道炎症の誘発，及び中和活性をほとんど示さない抗体がFc受容体を介してウイルスをマクロファージ内へ取り込み，その結果として感染増強や

病態の重症化等が想定されている。

以上の趣旨により、次の2つのことを陳情します。

1. 仮に、今後、ワクチン接種をした方たちの中和抗体価が減少した段階で新たに新型コロナに罹患すると、疾患増強を起こる可能性があることを鹿児島県のサイトなどで注意喚起すること。
2. 県内の医療機関に対して、現行のワクチン接種により将来疾患増強を起こる可能性があることを周知すること。

以上

(添付書類省略)